

(別紙様式3)

平成31年3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 岡山県岡山市北区内山下2-4-6
管理機関名 岡山県教育委員会
代表者名 教育長 鍵本芳明 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、
下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 岡山県立岡山城東高等学校
学校長名 浅沼 淳

3 研究開発名

「ステージは『世界』だ!」－異力を統合する城東システムの開発－

4 研究開発概要

(1) 学類専門力を統合する「課題研究」

教科「GLOBAL」における、科目「GLOBALⅠ」と「GLOBALⅢ」、および「総合的な学習の時間」の一部を校内名称「GLOBALⅡ」に変更した時間の中で研究開発を行う。

「GLOBALⅠ」は、1年次生全員を対象とし、地域の状況やグローバルな課題に関する基礎知識と、探究型学習の基礎的スキルを身に付ける。

「GLOBALⅡ」は、2年次生全員を対象とする。グローバルな課題を、学類を越えてチームを組み、岡山大学や経済界等と連携して行う。

「GLOBALⅠ」「GLOBALⅡ」の研究成果をもとに「課題研究発表会」を実施する。

「GLOBALⅢ」は、3年次生を対象とする選択科目で、「GLOBALⅡ」での研究テーマを継承したテーマについて、連携先を海外にも広げ、高度な課題研

究を行う。

(2) 専門性を深める「学類コア科目」等

これは学類必須科目である。「学類研修」と関係させながら、グローバルな観点から充実を図る。

(3) 視野を広げ、実践力を高める「海外体験」

アジア圏及び国内で実施している「学類研修」で専門分野を深化させる。選抜チームによるイギリスでの「海外修学研修」を開発する。その成果が「GLOBALⅢ」につながる。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
進捗状況把握	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
運営指導委員会の開催				○					○			
岡山大学等との連携	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(2) 実績の説明

ア 事業の管理

指定校との連携を密にし、学校訪問や課題研究発表会等の参観を通して、事業計画の進捗、教育課程の改善、課題研究や授業の改善等について、管理機関で状況を把握し、指導・助言等を行った。また、事業推進に係る確認事項等について、文部科学省と連絡を取り、事業目的が達成されるよう指定校への共通理解を図り、中間評価での指摘事項への改善・対応状況の確認も行った。年2回の運営指導委員会では、学識経験者及び企業関係者等から事業の実施内容や方法について指導・助言を受け、事業改善に反映させた。また、指定終了後の指定校の在り方についても意見をいただき、参考とした。

イ 事業推進に係る環境整備

高大連携の取組を生かして、本事業では特に岡山大学の教員からの指導や、大学生・大学院生によるTA等としての支援が得られやすい環境整備を行った。

各校の取組の実践発表により県内の好事例を普及させ授業改善を推進するため、県内の指導教諭を対象とした中核教員指導力向上研修を開催し、

指定校もポスター発表等を通して成果を普及した。

また、各校の学力向上の取組を中心として進める教員を対象とし、全県立高校が参加する合同分析会において、指定校はSGH5年間の成果と課題を報告し、他校の教育活動の参考となる実践例を提供した。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① 研究開発組織の設置	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
② 「GLOBAL I」の実施												
週2時間の実施期間	○	○	○	○	○	○	○					
週4時間の実施期間							○	○	○	○	○	○
課題研究A群							○	○	○			
課題研究B群									○	○	○	
シラバスの共有	○	○										
年間指導計画の作成								○	○	○	○	
公開授業							○					
講演会			○	○		○			○			
課題研究発表会											○	
授業評価の研究開発と実施	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③ 「GLOBAL II」の実施												
シラバスの共有	○	○										
年間指導計画の作成								○	○	○	○	
公開授業							○					
TV会議システム(skype)の運用		○	○	○			○	○				
フィールドワーク				○	○	○	○	○	○	○		
課題研究発表会											○	
授業評価の研究開発と実施	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④ 「GLOBAL III」の実施												
シラバスの共有	○	○										
年間指導計画の作成								○	○	○	○	
公開授業							○					
大学との連携	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
レポートの作成					○	○	○	○				
課題研究発表会											○	

授業評価の研究開発と実施	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤ 海外修学研修												
企画と準備	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
実施												○
報告会												○
⑥ 外部人材との連携												
コーディネーターとの連携	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
外国人講師との連携	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
外部講師との連携	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
大学院生等との連携	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑦ 評価・検証												
事業評価の研究開発		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
成果報告会の実施											○	
⑧ 各種委員会の開催												
運営指導委員会								○				○
企画（小）委員会	○	○	○			○		○	○	○	○	
推進（小）委員会	○		○			○	○	○	○	○		
⑨ ICT関係												
プロジェクターの管理運営	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
H P の管理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑩ 報告書等の作成												
生徒研究集録の作成									○	○	○	○
事業報告書の作成							○	○	○	○	○	○
⑪ 各種海外研修												
海外文化体験研修				○	○							
学類研修			○				○					
⑫ 資格試験受験の後押し					随				時			
⑬ 各種体験活動の情報提供					随				時			
⑭ 海外大学進学に向けた情報提供と指導					随				時			

(2) 実績の説明

ア 「SGH 講演会」

1 年次生を対象に、世界的課題等の基礎知識を得るための講演会を実施した。

第一回 平成 30 年 6 月 1 日（金）

大阪・神戸アメリカ総領事館 領事 Joseph Freeman 氏

「The Benefits and Challenges of Studying Abroad」

第二回 平成 30 年 7 月 10 日 (火)
岡山理科大学教職・学芸員センター長 教授 岡本 弥彦 氏
「課題研究の進め方」

第三回 平成 30 年 9 月 18 日 (火)
学研アソシエ 波多野 洋司 氏
「小論文とは何か」

第四回 平成 30 年 12 月 14 日 (金)
(株) トミヤコーポレーション 代表取締役会長 古市 大藏 氏
「グローバル人材になるために」

イ 「GLOBAL I」課題研究 A 群 (1 年次 10 月～12 月に実施)

- ・ 人間の生涯にわたる生活の営みを総合的にとらえる。
- ・ 社会との関わりについて理解し、地域と世界が繋がっていることを気づかせる。
- ・ 研究成果をポスターセッションで発表する。
- ・ 岡山大学の大学院生が TA (ティーチングアシスタント) として活動をサポートする。

ウ 「GLOBAL I」課題研究 B 群 (1 年次 12 月～2 月に実施)

- ・ 自らが国際社会の形成者であることの自覚を促し、研究テーマを通して視野を世界に広げる。
- ・ 研究テーマの解決策を探究したり、意見交換したりすることでより深い考察ができるようにする。
- ・ パワーポイントを利用して、研究成果を発表する。
- ・ A 群から継続して、岡山大学の大学院生が TA として活動をサポートする。

エ 「GLOBAL II」 (2 年次 4 月～3 月に実施)

- ・ 各コースに分かれ学類研修訪問先での発表のために探究活動を行う。
(5～6 月)
- ・ 8 つのテーマについて 6 人程度のグループで課題研究に取り組む。
- ・ 岡山大学の教授等から指導を受ける。(5～2 月)
- ・ テーマ毎に岡山大学の大学院生が TA として毎回の活動をサポートする。
- ・ 2 名の外国人 English Teacher から指導を受ける。
- ・ 県内外のスーパーグローバルハイスクール (以下、「SGH」という) 校や教育機関で研究成果を発表する。

(今年度は愛媛県立松山東高等学校、岡山県立岡山操山高等学校、岡山学芸館高等学校、関西学院大学で実施される「SGH 甲子園」)

オ 「GLOBALⅢ」（3年次 4月～2月に実施）

- ・ 希望する生徒が選択する個人研究。
- ・ 長期休業中や放課後に調査やフィールドワークを実施する。
- ・ 研究成果をまとめ、論文コンテストに応募する。
- ・ 県内外のSGH校や教育機関で研究成果を発表する。
（今年度は徳島県立城東高等学校、岡山県立岡山操山高等学校、岡山県教育委員会が主催する「きらり輝け！高校生教育フェア2018」）
- ・ 岡山大学の教授等から指導を受ける。
- ・ 3年間の課題研究を振り返り、日本語又は英語によるエッセイという形でまとめる。

カ 海外修学研修

平成31年3月2日（土）～3月10日（日）にイギリスコース10名で実施
（研修場所）オックスフォード大学、アードモア・ランゲージ・スクール、
クランフォード・コミュニティカレッジ、ナショナル・トラスト、
ロンドンフィールドワーク（大英博物館など）

キ 課題研究発表会

（平成31年2月6日（水）岡山県立岡山城東高等学校にて実施）

- ・ 3年次生によるステージ発表
『研究テーマ』「多文化共生のまちを目指して－高校生世代からみた解決策－」
- ・ 2年次生によるステージ発表（8班）及び県内SGH校による発表
『研究テーマ』
A グループ代表 「聖地巡礼で地域活性化するために」
B グループ代表 「はいきた！はいきやさい」
C グループ代表 「The negative effects of plastic bags on the environment and possible solutions for a cleaner and more sustainable future」
D グループ代表 「点字ブロックとの関わり方」
E グループ代表 「海ごみの現状」
F グループ代表 「人口減少社会の治安維持におけるコンパクトシティの有効性に関する考察」
G グループ代表 「居場所としてのスクールライブラリースペース～万人を迎え入れ、静かに放っておいてくれる場所～」
H グループ代表 「皇室と若者」
岡山操山高校代表 「岡山県の高校生の皮膚がんに対する意識に関する調査」
岡山学芸館高校代表 「カンボジアでの栄養教育の実現を目指して～現地での教育実践を通じて～」
- ・ 1・2年次生による教室でのプレゼンテーション方式による発表（25班）
- ・ 1年次生による教室でのポスターセッション方式による発表（13班）

(うち2班は岡山県立岡山操山高等学校、2班は岡山学芸館高校の発表)

ク 課題研究以外の取組

- ・ 海外文化体験研修（オーストラリアコースに19人、カナダコースに52人参加）を平成30年7月20日（金）～8月3日（金）に実施した。事前6回、事後2回の研修を実施。

【オーストラリア】

クイーンズランド大学でキャンパスツアー、英語プレゼンテーションレッスン
英語でのディスカッション、サンドゲート・ディストリクト州立高校の授業見学

【カナダ】

ブリティッシュコロンビア大学でキャンパスツアー、英語ディスカッション
英語レッスン、インタビュー、英語プレゼンテーション、少人数英語クラスでの研修

- ・ 学類研修（台湾95人、マレーシア118人、関東地方146人）を実施した。いずれも現地の高校・大学と交流、フィールドワークの実施。交流校は、台湾は銘傳大学、治平高校、マレーシアはベルジャヤ大学、マラヤ大学。
- ・ 中堅教員を中心とした校内研修会を定期的に行い、新採用の教員やベテランの教員も参加して、思考力や判断力、表現力などを効果的に高める指導方法を研究した。
- ・ 次年度以降の取組に活用するため、卒業生を対象にアンケートを実施し、スーパーグローバルハイスクールの取組の中で、大学での研究や学習に有効であるものを調査した。
- ・ 本校ホームページのSGHのサイトから随時、情報発信を行った。
- ・ 「中四国SGH高校生会議」や「SGH全国フォーラム」などの発表会に積極的に参加し、学校間交流を深めた。
- ・ 運営指導委員会や学校評議員会での意見や、岡山大学やベネッセコーポレーション関係者から助言を取り入れながら、評価方法や事業の進め方を改善した。
- ・ 5年間の研究指定での取組を分析し、成果や課題をとりまとめた。また分析結果は平成30年度SGH研究開発実施報告書にとりまとめ、全国のSGH校、SGHアソシエイト校及びの県内の高等学校に送付した。

7 目標の進捗状況、成果、評価

(1) 研究計画の進捗状況

研究計画は、予定通り実施できた。

(2) 成果

ア 課題研究

- ・ 課題研究発表会については、県内のSGH校である岡山操山高等学校、岡

山学芸館高等学校に相互に参加し交流することができた。このことで、互いに成果を共有するだけでなく、それぞれが刺激し合い、高め合える機会が作れた。

5年目を迎え、2年次生の研究も十分深まったので、今年度は、両校に2年次生を派遣し発表することができた。

- ・ SGH 甲子園に5名の生徒が応募し、今年度も1次審査のある「ラウンドテーブル型ディスカッション」に合格した。このことで、全てのSGH校が参加する研究成果ポスターセッションとあわせて3名の生徒が参加することになった。
- ・ 第57回全国高等学校生徒英作文コンテスト入賞するなど、いくつかのコンテストで研究論文が入賞し、研究成果が評価された。

イ 課題研究以外の取組

- ・ 全ての教科から主体性やチーム力、思考力といったSGHで育成したい資質能力の伸長につながった授業実践例を集約し、その中から効果的な授業実践例を取りまとめ、教員に配付することで効果的な指導方法を共有した。
- ・ 今年度は、学類研修で2年次生355名の内、マレーシアコースに118名、台湾コースに95名が参加するなど、海外の研修に多くの生徒を参加させることができた。
- ・ 学校で実施する海外研修以外に、長期休業日を利用して、アメリカやカナダなどへの短期海外留学に22名の生徒が参加した。
- ・ 「トビタテ！留学 JAPAN」の第5期派遣留学生に4名が応募し、2名の生徒が書類選考に合格した。
- ・ 平成30年度に募集のあった岡山県教育委員会の留学支援を活用して、1名の生徒が、平成31年4月から12月までニュージーランドに留学することになった。
- ・ SGH 成果報告会を実施し、5年間の取組を分析し明らかになった研究成果や課題を発信した。

(3) 評価

仮説に基づく成果や課題の分析を行うため、ベネッセコーポレーション作成の「GPS-Academic」と学校が岡山大学やベネッセコーポレーション、岡山県教育委員会と作成した「SGHに関する調査」を生徒対象に実施した。

2年次生は「GPS-Academic」の上位の評価であるS及びAの人数が「批判的思考力」で114名（1年次の時の結果は62名）に、また、「創造的思考力」で170名（1年次の時の結果は139名）に増加した。1年次生も上位の評価であるS及びAの人数が「批判的思考力」で114名、「創造的思考力」で177名であるなど、過去3年間で平成30年度が最も多かった。

1・2年次生に実施している「SGHに関する調査」では、7つの質問について、基礎、応用、発展の3つのレベルで達成された姿を示しているが、2年次生については、過去の結果と同様に発展的なレベルの肯定的な回答の割合が、

「課題設定能力」「論理的思考力」「受容力」及び「協働」について、1年次の時の結果より高くなっており、2年次の課題研究「GLOBALⅡ」が発展的な学力の向上に効果的であると評価できる。

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

1年次から3年次まで、課題研究「GLOBALⅠ」「GLOBALⅡ」「GLOBALⅢ」を開発して取り組んできた。1年次では、身近なテーマでの課題研究を実践しながら、探究型学習の基礎的技能を身に付け、2年次ではグローバルな課題について学類を越えたチームで研究し、岡山大学や経済界等と連携しながら、高校生としての解決策を提言した。3年次では選択者がより発展的な研究を個人で行った。これまでの5年間の実践から、グローバル課題に関する本校独自の課題研究のスタイルが完成した。来年度の1年次生の「総合的な探究の時間」では、この課題研究を取り入れた探究学習を実施する。

また、「海外修学研修」を開発・実践し、イギリスの大学や高校を訪れ、グローバル課題の解決策を提案したり、課題研究「GLOBALⅡ」の研究成果を発信・協議したりした。現地にでかけ、議論や協議をするといった取組を通じて、生徒はグローバル社会で活躍する人材に必要な資質や能力を直接感じることができた。研修成果は海外修学研修参加生徒による報告会で発表され、学校全体で共有することになり、学校全体でグローバルな意識の高揚が図れた。

さらに、JAXA（宇宙航空研究開発機構）訪問やオホーツク海での洋上研修、海外交流校での英語による自国の文化・歴史紹介など、学類での専門的知識を活用する体験や、グローバルな体験をする「学類研修」を実施した。研修先では、課題研究の研究テーマに関するインタビューや、データ収集などフィールドワークを行ったグループもあり、課題研究と関連付けながら実施できた。特にマレーシアや台湾といった海外に出かけた生徒は、文化や考え方の違いを直接実感できた。この研修を通じて知的好奇心の高揚や、グローバルな視野を育成することができた。

(2) 高大接続の状況について

スーパーグローバル大学である岡山大学とは、協定を結び、毎年度、課題研究に指導者を派遣いただいた。

1年次の課題研究「GLOBALⅠ」では、大学院生を派遣してもらい、課題研究での論文やプレゼンテーション資料の作成、研究発表などで、毎時間指導いただいた。また、課題研究の手法に関する講演会に大学教員を派遣いただいた。

2年次の課題研究「GLOBALⅡ」では、毎年度8名の大学教員が、本校で設定している8つのテーマの担当教員となり、年間3回、担当するグループの課題研究で指導いただいた。本校教員や生徒は、疑問や問題があるとメールにより質問することがあったが丁寧に対応いただけた。

また、大学院生も派遣してもらい、研究テーマに関する質問や、研究手法などで毎時間指導いただいた。

3年次の課題研究「GLOBALⅢ」では4名の大学教員から指導・助言をいただいた。5月には、大学の授業に本校生徒が参加して、大学生とディスカッションする機会を提供いただいた。また、中間・最終発表では、研究内容や研究方法などで指導いただいた。

スーパーグローバルハイスクールの取組を通じて、学習への興味関心が高まった生徒は、岡山大学が高校生に聴講を認めている「高校生が岡大キャンパスで大学生と共に受ける授業の聴講」や「高校生のための大学講座」に参加するなどして、より専門的な学びを体験した。また、くらしき作陽大学とは「JSPP（城東作陽パートナーシッププログラム）」を実施しており、専門学習に興味や関心をもった音楽学類の生徒が、大学に出かけ高いレベルの学習を受けている。

（3）生徒の変化について

平成26年度から、課題研究を通じて、グローバルリーダーに必要な「課題設定能力」「課題解決力」「論理的思考力」「批判的思考力」「表現力」「受容力」「協働」の7つの能力が身に付いたかどうかを、学校がベネッセコーポレーションや岡山大学、岡山県教育委員会と共同で開発した生徒質問紙「SGHに関する調査」で調査した。

この質問紙では、7つの能力について、基礎、応用、発展の3つのレベルで達成された姿を示しており、生徒は1年間の取組から、自分がどのレベルにあてはまるかどうかを評価する。5年間の調査から次のような結果があった。

「課題解決力」「論理的思考力」「表現力」「協働」については、基礎レベルの質問に、毎年度7割以上の生徒があてはまると回答している。「調査研究の方法や手順、注意点について理解することができた。」「自分たちの研究内容を相手に理解してもらうために必要な事柄（目的と結論、その根拠を示すこと、発表内容の構成など）について、理解することができた」など、高い自己評価を得たことから基礎的能力の定着は伺える。

一方、この調査結果では、多くの項目で、1年次生から2年次生にかけて自己評価が下がっている。これは、生徒が2年次の課題研究の方が高いレベルの資質・能力を発揮することが求められていると感じるなど意識が高まり、自己評価の基準が上がるためだと考えている。このような傾向があることは、2年次に自己評価を下げた生徒に対する聞き取りからも裏付けられたが、発展レベルの質問については、上がっている項目も多くあり、2年次の課題研究の困難さが発展的な資質・能力の向上につながったと考えられる。

特に発展レベルの質問への肯定的な回答の割合（%）が顕著であったのは次のとおりである。

- ・課題設定能力

H26 入学生 1年次 50.3→2年次 52.9

H27 入学生 1年次 44.4→2年次 46.7

- ・課題解決力

H28 入学生 2年次 40.3→2年次 42.0

- ・論理的思考力
H26 入学生 2年次 46.9→2年次 47.1
- ・批判的思考力
H26 入学生 1年次 17.6→2年次 18.1
H28 入学生 1年次 21.3→2年次 22.8

さらに受容力の発展レベルの質問は、毎年度とも肯定的な回答の割合が向上している。

発展レベルの質問への肯定的な回答の割合（％）は次のとおりである。

- ・H26 入学生 1年次 50.9→2年次 56.6
- ・H27 入学生 1年次 47.5→2年次 53.8
- ・H28 入学生 1年次 54.1→2年次 54.9

これは、課題を設定、探究し、成果を発表するといった取組において、学類を越えた話し合いや協働により探究を重ねてきた、本校 SGH の特色である「異力の統合」が効果的であったと考えられる。

卒業後の進路についても、A0 入試や推薦入試を志願する生徒が増加傾向にあるなど、課題研究を通じて学習への興味や関心が高まったり、より早い時期に将来の進路が明確になったりしたと考えられる。

- ・国公立大学への A0 入試・推薦入試志願者
H26 (49 人) H27 (57 人) H28 (79 人) H29 (75 人) H30 (71 人)
また、主体性も SGH の取組を通じて高まったと考えられる。

岡山大学が主催する「高校生が岡大キャンパスで大学生と共に受ける授業の聴講」や「高校生のための大学講座」への参加者も年々増加しており、平成 26 年度は 9 名の参加であったが、平成 29 年度は 19 名が参加した。また、平成 30 年度は 60 名以上の生徒が志願している。課題研究で学習や学類コア科目での専門的な学習から、学習に対する興味関心や主体性が大きく高まったと考えられる。

(4) 教師の変化について

平成 26、27 年度に生徒を対象に実施した「SGH に関する調査」では、批判的思考力の発展的な質問に対する肯定的な回答の割合が低く（H26 1年次 17.6％ H27 1年次 16.1％ 2年次 12.3％）また、年次の進行に伴い、肯定的な回答の割合が低下するなど学校全体で課題が共通認識されるようになり、課題改善に向けて、課題研究の授業だけでなく、教科の授業の中でも、SGH で身に付けさせたい能力の育成を意識して各教員が指導をするようになった。

教科の指導では

- ・自分の立てた「問い」を付箋に書き、グループ内で分類し、話し合っって根源的な「問い」を作る（国語）
- ・発表者以外の班員で、発表内容についてその説明の論旨の明確性等につい

て総合的に評価する（地理歴史）

- ・ 他の班と自分の班の実験結果を比較し自分の班の根拠を説明する。また、他の班からの意見を聞く。（理科）

など多くの教科で課題解決力、思考力・判断力・表現力、活用力といったSGHで育成したい能力を高める授業が推進された。そして平成30年度に、各教科からSGHで身に付けさせたい能力を育む授業実践例を集めたところ、全ての教科から33の実践例が提出された。

SGHの5年間の取組を進めていく中で、課題研究において行うような活発な議論や生徒による課題設定などが多くの教科の授業の中に取り入れられるようになった。このことは教員の大きな変化である。また、ベネッセコーポレーションによる「GPS-Academic」の批判的な思考力については

批判的思考力の上位2段階（S,A）の生徒数

H26（1年次76人、2年次80人） H28（1年次114人、2年次114人）

これらの結果からも教員の指導の変化が伺える。

（5）学校における他の要素の変化について

平成28年度の文部科学省の中間評価では、「これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成がおおむね可能と判断されるものの、併せて取組改善の努力も求められる。」とされ、特に改善点として、学校全体での取組が十分でないといった指摘があった。このことを受けて、平成29年度から課題研究の指導に全ての教員が取り組む体制を整備した。これは、全ての教員から、課題研究で指導できることを集約し、課題研究で困っている生徒に支援できる教員を紹介する取組である。これを実践したことで、異なる学年間や学類間で教員が連携・協力することになり、学校組織の活性化が一層進んだ。

また、本校に入学させる保護者も、本校のSGHでの取組を期待して入学させていることが学校自己評価アンケートの結果から伺えた。学校自己評価の「城東高校は授業や学校行事、講演会などを通じて、グローバルな視野を育てようとしている」といった質問についての肯定的な回答の割合は高く、平成30年度も8割以上の保護者が肯定的な回答をしている。また、「城東高校は他者と協力して様々な課題を解決する力が身に付く学校である」といった質問についても7割の保護者が肯定的な回答をしており、課題研究を中心にしながら主体性や協働、チーム力といったグローバルリーダーに必要な能力を育てる学校といった認識が地域や中学校に広がったと考えられる。

（6）課題や問題点について

グローバルな視点で課題研究を行ってきたが、研究テーマによっては、企業と連携した研究や、地域課題を解決するような研究が少なかったこともあり、聞き取り調査や実験・観察、アンケートといったフィールドワークが十分実施することができなかった生徒が少なからずいた。また、SGHの様々な取組を通じて、生徒の主体性を伸ばす教育を進めてきたが、全ての授業で実施できたとは言いがたい。こうした課題点を踏まえ、次年度以降の教育活動を進めていく必要がある。

(7) 今後の持続可能性について

開発・実践してきた課題研究のプログラムは、来年度の総合的な探究の時間において継続して実施していく。これまでの5年間は岡山大学の教授等や大学院生に指導・支援いただいたが、探究活動において外部の人材から支援をいただくことは非常に効果が大きかったので、来年度以降も岡山大学と連携を強め、継続的な支援を依頼することとしている。

また、岡山県経済団体連絡協議会からは、運営指導委員としてSGHの取組について指導・助言をいただいた。来年度は、多くの県内企業に協力いただきながら地域でのフィールドワークを重視した課題研究を進めていく計画であり、これまで以上に連携をすすめていく予定である。

海外研修は、異文化理解の深化や語学力の育成、主体性などグローバルリーダーに必要と考えられる資質・能力の伸長に有効と考えており、今後も工夫・改善しながら継続していく。

【担当者】

担当課	岡山県教育庁高校教育課 指導班	TEL	086-226-7585
氏名	森 良恵	FAX	086-224-2535
職名	指導主事(主幹)	e-mail	sido-koukou@pref.okayama.lg.jp